

平成 25 年度 第 3 回小学校ゼミナール記録

2013 年 6 月 13 日 (木)

於：広島大学附属小学校

司会：大滝孝治（広島大学院生）

参加者：上ヶ谷（発表者）他 17 人

1. 検討論文

What is a Pattern? Criteria Used by Teachers and Young Children (McGarvey, 2012: 3 回目) 第 6 節

2. 発表内容

今回は、前回に引き続き、教師と生徒へ対する調査の結果について発表が行われた。

無秩序に分類される要素においては、「空間的構成[spatial organization]」の予測可能性が重要な規準であったという。「それは続く」や「繰り返す」というフレーズを用いて理由が語られることから見て取れる。発表者からは、さまざまな要素に対して予測可能性を述べているが、その中でも大きさに着目した規準を用いるのは子どもだけではないかという考察が示された。

対称的な要素においては、個人のイメージの中における繰り返しのパターン、イメージの折り返し、要求される繰り返し回数、許容される変形の種類、及びイメージの半分の予測可能性が用いられている規準であるという。

3. 議論内容（一部を要約して抜粋）

・教師と子どものパターンの見方は違うのだろうか。

大人と子どもには、着目するパターンが異なったり、着目するものは同じでもそれをパターンとみなすかどうかの感覚が異なったりする。大人には見えるが子どもには見えない、またはその逆がありうる。次回以降の発表内容ではあるが、この点が論文では最終的にカリキュラムの再考を提案することに関連している。

・子どもは部分を見て、大人は全体を見てパターンを見出すのか。

大人は全体も部分も両方を見る（出席した現職教員からそのような事例が紹介された）。子どもはある部分を見つければパターンだと飛びついてしまうのではないか。また、子どもはそれを見ている時にパターンと見ることができればパターンであり、大人は時間をおいてもまた同じパターンだとみなせるようなパターンを見出そうとする。このことから、パターンは対象の中にあるものではなく、見る側の主観の中にあるものである。

(文責：辻本 亜希)